

個別性を加味しながら 災害への対策ができる訪問看護



今野 知穂 • Konno Chiho

ソフィア総合ナーステーション城南

災害看護専門看護師（災害看護 CNS）の資格取得を志した理由として、私自身が東日本大震災で被災を経験したことが大きいかもしれません。東日本大震災で自分の身に起きた現実を目の当たりにしたとき、被災するということがどういうことなのか初めてわかりました。思い出が詰まった自宅を失った人、大切な家族を亡くした人、帰れる場所はあるが戻れない人など、それぞれの身に生じた被災のかたちによってもまた気持ちは異なると思いますし、何よりもこれらの気持ちというのは経験した人にしかわからない気持ちであると感じています。

犠牲になられた方々の声を聞きたくても聞くことはできませんし、「もうこれ以上、私と同じような経験をやる人が増えないでほしい」と思いました。微力ではあると思いますが、「犠牲になられた方々の分まで生きて、被災した地域住民の声を伝えていきながら、同じことが繰り返されないように災害に備えていくこと」が生かされた者の役割として、震災での経験を無駄にせず、そして犠牲になられた方々の供養につながるのではないかと感じています。

今後また、いつ、どこで自然災害が発生するのかわかりません。被災した際に多くのご支援をいただき、私自身も本当に救われました。この感謝の気持ちを“災害看護 CNS”という立場で何かしらのかたちでお返ししていき、その中で少しでも誰かのお役に立つことができればと思っています。

❖ 災害看護 CNS は在宅現場にも必要な存在

私は、これまでは主に急性期の病院で働いてきましたが、現在は訪問看護ステーションに勤務しています。

災害看護を学んでいる大学院生だった頃、被災地の在宅の現場で働く医療・介護者の方々から震災当時の状況や活動内容を伺える大変貴重な機会があり、「病院だけでなく、在宅の現場に医療スタッフが存在することの意義や必要性」をより強く認識する機会となりました。

病院には災害に長けている医療者が多く存在していると思いますが、訪問看護ステーションにはそのような医療者がほとんど存在していないように感じています。そのため、平常時・災害時に連携をはかるといっても「災害看護 CNS は病院だけにとどまらず、在宅の現場にも存在すべきではないか」と思い、訪問看護ステーションを選択しました。

❖ 訪問看護の現場にいる災害看護 CNS として

東日本大震災のときもそうでしたが、被災が広範囲にわたるとライフラインが復旧するまでに時間を要しますし、救援者の到着や物資が届くまでにも時間がかかります。その間、自宅や会社等にある物を有効活用しながら、その場を乗り切っていくことが必要になります。

首都直下型地震等では避難所に避難する人が多く、入りきれない人々が発生すると想定されており、「自宅が無事である人たちは、避難所ではなく在宅で生活をするようになる」と言われています。すると自助はもちろんのこと共助の力も必要になります。

例えば在宅酸素などの医療機器使用者やストーマ装着者等には、通常の訪問看護を通して物品の保管場所や残量・数の確認、機器類の使用法の再確認などを行い、災害が発生した場合に利用者自身や家族が不安なく対応できるように専門的な視点から指導するよう心がけています。利用者によって訪問時間が異なるため、通常の必要なケアを行いながらの指導は時間も限られ、正直難しい点ではありますが、個別性を加味して災害対策をとることができるのは訪問看護ならではの強みです。

それだけでなく、「日頃連携している医療・介護スタッフと災害時の対応について一緒に考える」などコンサルタントとしても活動してきながら、病院関係者や自治体関係者と連携して、避難所や遺体安置所、さらには仮設住宅での支援についても協力しあって実践していくことが可能となるのではないかと考えています。

訪問看護ステーションにおける災害対策には、まだまだ課題がたくさんあると思います。今後の災害に備え、さまざまな課題と向き合いながら、地域に貢献できるよう活動していきたいと考えています。